課題場面別におけるＩＣＴを活用した実践仮説

１　対象児童の実態

（１）　基本情報

①　小学校第１学年　　②障害種別（注意欠陥多動性障害）

（２）　学習上又は生活上の困難

・集中の持続が難しい。
・言語理解が苦手で，自分の気持ちを言葉で伝えることや援助要請することなどに難しさがある。
・気持ちや行動の切り替えが苦手である。

（３）　困難さの背景・要因

・言語理解が弱く、語彙が少ない。ひらがなを読む時に単語のまとまりとして捉えられず、たどり読みになってしまう。拗音や促音を正しく読めないことがある。
・質問の意味が理解できず、質問とずれた返答をすることがある。
・国語の学習などで、自分の思いがあってもうまく言葉にできず、自分の思いを伝えられないことがある。

２　指導目標及び指導目標を達成するために使用する教材

（１）　指導目標

・自分の気持ちや考えを相手に言葉で伝えることができる。
・コミュニケーションの基本的なスキルを学び，友達と仲良く関わることができる。

（２）　学習指導要領との関連

・６　コミュニケーション（３）言語の形成と活用に関すること
幼児児童生徒の興味・関心に応じた教材を活用し、語彙を増やしたり、言葉のやり取りを楽しんだりする指導を行う。また、語彙の習得や上位概念、属性、関連語等の言語概念の形成のために、様々な事物を関連付けながら言語化を行うことで、コミュニケーションに対する意欲を高め、言葉を生活の中で生かせるようにしていく。

（３） 指導目標を達成するために使用する教材（ＩＣＴ教材等を含む）

mim　アセスメント用プリント
→・iPad ディスレクシア音読指導アプリ単音版ビギナー・チャレンジャー
　・ミライシード　ドリルパーク放課後用　１年「ちいさいやゆよ」
　　「ひらがなのよみかき」

３　ＩＣＴ教材等について

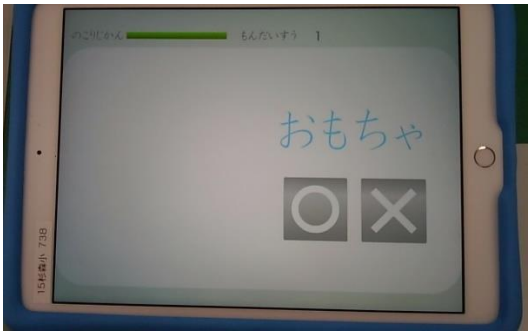
（１） 課題場面

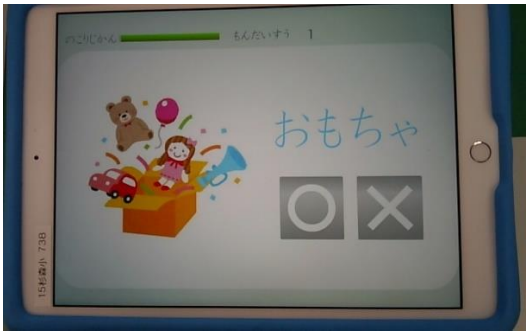
①読み書きに関する場面
②読字や意味把握に困難さがある場合
イラストとともに表示されるひらがなを正しく発音する、正しい表記の単語を選ぶ。

（２） 具体的な実践事例または想定される実践

〇ミライシード　ドリルパーク放課後用　１年「ちいさいやゆよ」「ひらがなのよみかき」
・イラストともに表示された選択肢を一度音読させ、その後正しいものを選ばせることで、絵と音声と文字を結び付けて覚えることにつながると考える。
・現在、mim を１回１５～３０問程度（１０分弱）行っている。mim に代わり、上記 ICT 教材を１回５分程度、毎回の指導で繰り返し行うことで、読みの定着や語彙の取得につながると考える。また、家庭学習でも使ってもらうことでさらに定着を図ることができる。

〇ディスレクシア音読指導アプリ単音版ビギナー・チャレンジャー
・ひらがなと絵を見て、音声が流れる前に正しく発音ができたら教師が〇をタップする。
・ひらがなを見て、児童自身が発音し、直後に流れる音声を聞くことで、文字と音声と児童自身の発音を結びつけることができると考える。
・ミライシード同様、現在行っている mim の課題に代わり１回１セット、毎回の指導または家庭学習で取り組んでいくことで、定着を図ることができると考える。





課題場面別におけるＩＣＴを活用した実践事例

１　対象児童の実態

（１）　基本情報

①小学校第１学年　　②障害種別（注意欠陥多動性障害）

（２）　学習上又は生活上の困難

・集中力の持続が難しく、勝手に立ち歩いてしまう。
・カタカナ、漢字等、書く、読むことが困難である。

（３）　困難さの背景・要因

・生活に必要な基本的な語彙が十分に獲得されないまま小学校に入学した。
・不安感が強く学習に対する抵抗が強かったことで授業中座っていることが難しい様子であった。そのことで平仮名、カタカナ、漢字の読み・書きの獲得が難しくなった要因であると考える。

２　指導目標及び指導目標を達成するために使用する教材

（１）　指導目標

・自分の気持ちや考えを言葉で伝えようとすることができる。
・少しでも小集団の流れに沿って行動することができる。

（２）　学習指導要領との関連

・６　コミュニケーション　（３）言語の形成と活用に関すること
興味・関心に応じた教材を活用し、語彙を増やしたり言葉のやりとりを楽しんだりすること。

（３）　指導目標を達成するために使用する教材（ＩＣＴ教材等を含む）

・「iPad B06 図工　Paintone+　」

３　ＩＣＴ教材等について

（１） 課題場面

①読み書きに関する場面

カタカナ、漢字の練習の単語帳として

（２） 具体的な実践事例または想定される実践

〇文字の形と音がつながりにくい子に、カタカナ、漢字の単語帳として「iPad B06 図工 Paintone+ 」 を使用した。

・教師が作成したものを使い、カタカナを読み、画面を押すと音声が出て読んだことがあっているかすぐ分かり、何度も読み、文字と絵と音声がつなげる練習となった。

・１回２分、２回行ったら、興味をもって読むことができた。カタカナと絵はつながり読め、自分で合っているか評価することができた。３つの果物のカタカナを読めるようになった。

今後は、自分でカタカナと絵を描き、音も入れて自分の単語帳を作りカタカナの読みができるようにしていきたい。

＊自分で読んだ後、絵を押すと「リンゴ」と答えの音声が出る。

１，２年生でも簡単に作成が可能である。

課題場面別におけるＩＣＴを活用した実践仮説

１　対象児童の実態

（１）　基本情報

①　小学校第２学年　　②注意欠陥多動性障害

（２）　学習上又は生活上の困難

・文字を書くことが苦手。
・体の動かし方がぎこちない。
・気持ちのコントロールが苦手で衝動性が高い。

（３）　困難さの背景・要因

・目の動きの苦手さや、指示や動きのポイントの聞き逃しが考えられる。
・他者理解の弱さ、時間の見通しの持ちにくさが一つの要因として考えられる。

２　指導目標及び指導目標を達成するために使用する教材

（１）　指導目標

・活動を通して友達と仲良くかかわろうとすることができる。
・身体の動きや声の大きさの調整ができる。
・自分の特性を知り、落ち着いて行動しようとすることができる。

（２）　学習指導要領との関連

・３．人間関係の形成　　自己理解と行動の調整

・４．環境の把握　　感覚、認知の特性についての理解と対応

・５．身体の動き　　作業に必要な動作と円滑な遂行
　　認知や行動の手掛かりとなる概念の形成

（３）　指導目標を達成するために使用する教材（ＩＣＴ教材等を含む）

・ビジョントレーニング　→ipad「メノコト３６５」
・ipad「シンプルカメラ」
・ipad「NHK　for　school スマイル 」
・ipad「筆順辞典」
・ipad「えにっき」「アンガーログ」

３　ＩＣＴ教材等について

（１） 課題場面

① ④・・・板書の書き写しの困難さへの対処
② 　・・・漢字が覚えられない。言葉の意味がよく分からない。
⑤ ⑥・・・どのような対処をしたらよいか分からない。
　　他者の気持ちや状況がわからない。

（２） 具体的な実践事例または想定される実践

仮説 1. 下記の指導を３か月続けることで、書くことへの負担が軽減し、関心が高まるのではないか。

① 「シンプルカメラ」で写して、ノートの横において、視写する練習をする。
はじめは、部分的に写すため、デジタル写真にマーカーを入れる。
② 「NHK　for　school スマイル」の「ノートの使い方の魔法」「道具を使う魔法」チャプターを使い、必要なポイントを見せる。
③ ビジョントレーニングに毎週 5 分取り組む。
④ 「えにっき」で、好きなものの写真を撮ったり、一言記録したりする。

仮説２. 下記の指導を半年続けることで、漢字の形や書き順に注目できるようになるのではないか。

① 「筆順辞典」で、毎週、新出漢字を手書きで検索し、なぞり書きをする。
② 「筆順辞典」で、その漢字を使った熟語の意味調べをする。

仮説３. 下記の指導を加えることで、自他の理解が深まり、対処方法が増やせるのではないか。

① 「NHK　for　school スマイル」の「周りを見る魔法」「声の使い方の魔法」「気持ちを知る魔法」など、チャプターを使い、必要なポイントを見せる。
② 「アンガーログ」で簡単な日記とともに自分の気持ちを記録する。

課題場面別におけるＩＣＴを活用した実践事例

１　対象児童の実態

（１）　基本情報

①　小学校第３学年　　②学習障害

（２）　学習上又は生活上の困難

・うまくいかないことが重なると、気持ちのコントロールが難しく、切り替えるまでに時間がかかる。
・漢字の読み書きや、文章の音読・読み取りに困難さがある。
・気が散りやすく、集中力を長時間持続させることが難しい。

（３）　困難さの背景・要因

・ワーキングメモリーと処理速度に低さがあり、読み書きの苦手さにつながっていると考えられる。
・漢字は読み書きともに定着が難しく、書き取りは字形を整えて書くことも苦手である。

２　指導目標及び指導目標を達成するために使用する教材

（１）　指導目標

・自分の気持ちや考えを言葉で伝え、落ち着いて行動することができる。
・読み書き等、できることを増やし、自信につなげることができる。

（２）　学習指導要領との関連

・５身体の動き（３）日常生活に必要な基本動作
　苦手さのある書字に ICT 機器を用いることで、落ち着いて取り組み、自信をもてるようにすること。

（３）　指導目標を達成するために使用する教材（ＩＣＴ教材等を含む）

・「iPad A04 コミュニケーション 筆談パット」

３　ＩＣＴ教材等について

（１）　課題場面

①読み書きに関する場面
　漢字の書き取りの練習場面において使用した。

（２）　具体的な実践事例または想定される実践

　漢字の書き方の定着に苦手さがある児童に、書き取り練習の教材として「iPad A04 コミュニケーション　筆談パット」を使用した。

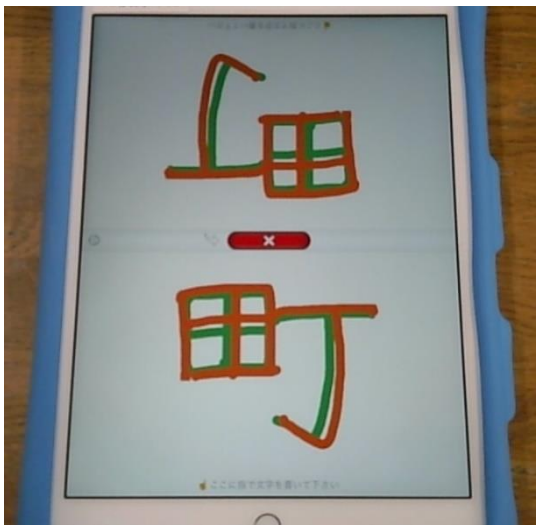
・1 回目の指導は教師が課題を出す形式で 10 分程度行った。まず、こちらの書いた漢字を児童がなぞる練習を行った。教師と児童のペンの色が異なるため、教師の書いた字と自分のなぞった字を比較しながらなぞることができた。また教師の書き方を見られるので、正しい書き順を意識して取り組むことができた。

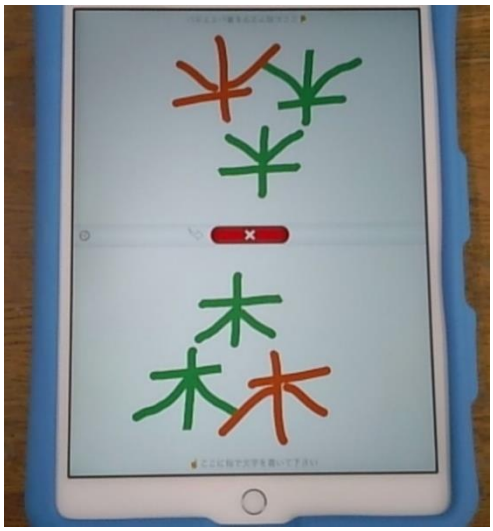
・次に、教師が漢字の一部を書き、児童が続きを書き足す練習を行った。児童に続きを書けるかどうか聞きながら、一画ずつ書き進めた。児童が「自分で書ける」と答えた段階で、取り組ませることで、安心して練習することができた。

・2 回目の指導は、教師と児童が交互に課題を出す形式で 10 分程度行った。出題者が漢字の一部を書き、回答者が続きを書いた。児童は問題の出題を積極的に行い、慣れてくると友達にも出題をしていた。

・筆順パッドを使用して練習を行ったメリットは、戻るボタンを押すと一画ずつ消すことができるので、間違いを気にせずに練習ができた点である。間違いが多いと、いらいらすることがあったので、一文字ずつテンポよく練習することで、楽しく取り組むことができた。

・改善点としては、問題の出題範囲が曖昧になっていた点である。漢字辞典や漢字ドリルなどを使い出題範囲を絞ることで、書けた字を記録したり、書き方が分からない時に自分で調べたりすることができるのではないか。今後は家庭での活用も視野に入れて練習方法を工夫していきたい。





課題場面別におけるＩＣＴを活用した実践仮説

１　対象児童の実態

（１）　基本情報

①　小学校第３学年　　③障害種別（注意欠陥多動性障害）

（２）　学習上又は生活上の困難

・集中継続時間が短い。行動の切り替えが苦手である。 ・自分の気持ちを言葉で伝えることが苦手である。 ・興味あることを優先させてしまい、学習参加が難しい。

（３）　困難さの背景・要因

・口頭だけの指示では抜けてしまうことが多い。 ・何をすればよいのか忘れてしまったり、間違いを恐れたりして、学習に取り組めない。 ・音に過敏であり、集中がしづらい。

２　指導目標及び指導目標を達成するために使用する教材

（１）　指導目標

・自分の気持ちや考えを担当教師に言葉で伝えようとすることができる。 ・小集団の流れに沿って授業に参加し、友達と少しでも楽しく過ごすことができる。

（２）　学習指導要領との関連

・６　コミュニケーション（３）言語の形成と活用に関すること 幼児児童生徒の興味・関心に応じた教材を活用し、語彙を増やしたり、言葉のやり取りを楽しんだりする指導を行う。また、語彙の習得や上位概念、属性、関連語等の言語概念の形成のために、様々な事物を関連付けながら言語化を行うことで、コミュニケーションに対する意欲を高め、言葉を生活の中で生かせるようにしていく。

（３）　指導目標を達成するために使用する教材（ＩＣＴ教材等を含む）

mim　アセスメント用プリント →・iPad アプリケーション「やること」

３　ＩＣＴ教材等について

（１） 課題場面

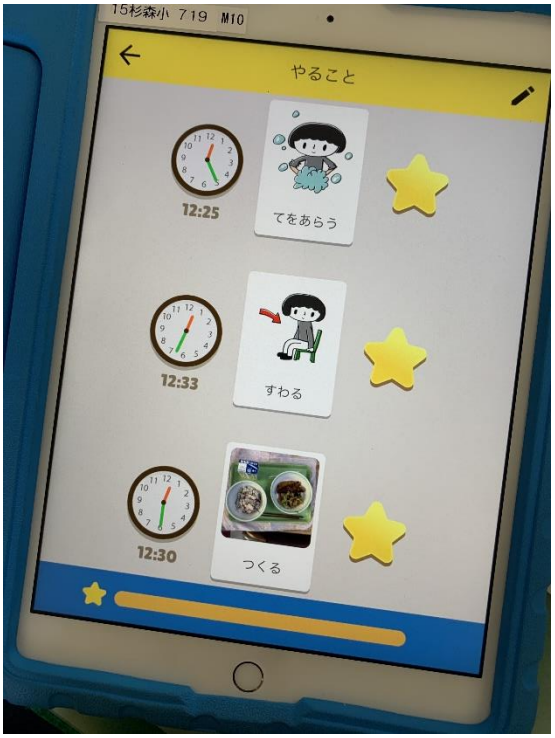
① 給食前のやること
② 家でやること
③ 通級の個別指導でやること

上記の見通しをもたせる。

（２） 具体的な実践事例または想定される実践

〇給食前にやること
「手洗い→着席→配膳→食べる→飲む→片付け」
という流れを教師の支援のもと自分で作成し、できたら自分で星マークを付けた。

〇家でやることを本人のタブレットで作成し、
実施を試みた。



〇通級でやることを作成した。
自分で写真を撮り「野球盤」
「プリント」等の項目を作成した。
文字入力はスムーズにできた。

改善点
・自主的にアプリを使えるようにはじめは声がけが必要。
・星マークは、「編集モード」にしないとリフレッシュできないため面倒さがある。

課題場面別におけるＩＣＴを活用した実践事例

１　対象児童の実態

（１）　基本情報

①　小学校第４学年　　③自閉症

（２）　学習上又は生活上の困難

・言葉の表出によるコミュニケーションをとることは難しく、家族や特定の友達のみ話すことができる。
・家族に対しても自分の気持ちをうまく伝えられずに感情のコントロールをできなくなることもある。
・学習面での困難さもあり、文字は平仮名であれば書くことができるが、カタカナや漢字を書くことは難しい。書字への抵抗感も高い。

（３）　困難さの背景・要因

・発達の遅れが要因となり、学習のつまずきや言語表出の難しさ、他者とのコミュニケーションの困難さになっていると考えられる。
・不安や緊張が高いことによって予想外のことには対応できずパニック（泣いて怒ること）になることもある。

２　指導目標及び指導目標を達成するために使用する教材

（１）　指導目標

・友達との関わり方を知り、関わろうとすることができる。
・自分のよさに気付き、自信をもつことができる。

（２）　学習指導要領との関連

・心理的な安定（２）状況の理解と変化への対応に関すること
　対話的な学習を進めるために選択肢の提示や筆談などの学習方法を活用することで情緒の安定を図りながら他者とのやり取りができる場面を増やしていく。
・コミュニケーション（１）コミュニケーションの基本的能力に関すること
　自分の気持ちを相手に伝える方法の一つとして、自分の気持ちを表した絵カードを使い要求を伝える手段を広げていく。

（３）　指導目標を達成するために使用する教材（ＩＣＴ教材等を含む）

「iPad A04 筆談パッド」
「iPad A07 こころく」

３　ＩＣＴ教材等について

（１）　課題場面

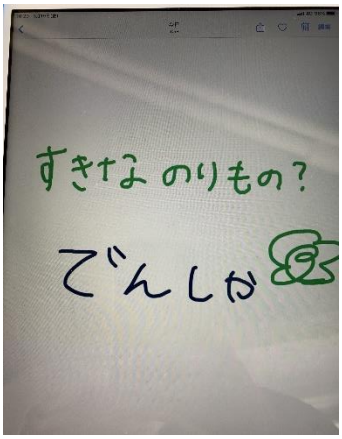
③文字を覚えて書くことに困難さがある場面
⑥自分の気持ちを言葉以外の方法で表現する場面
⑨言葉での表出が困難で他者とのコミュニケーションが取りづらい場面

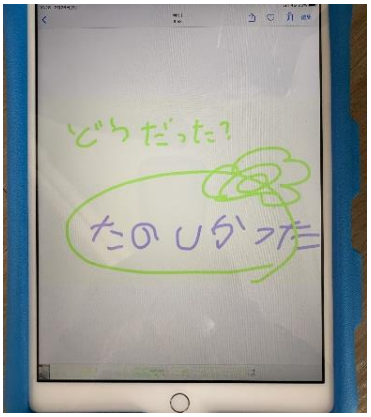
（２）　具体的な実践事例または想定される実践

「筆談パット」

③⑥事前に用意した質問（「好きな食べ物は？」）から答えを文字で書く活動をしました。答えは選択肢から選ばせることで、見本の文字を見ながら自信をもって書くことができました。文字を書くことの抵抗感が少しずつ減り、「筆談パッド」を用いた言葉のやり取りの中で、教師が「今日の活動はどうだった？」と書くと「楽しかった」と書きました。初めて文字で気持ちを伝えられることができました。

⑨他者とやり取りをする楽しさを味わうことを目的とし、絵を描く活動を行いました。対面で交互に線や模様を足していき、一つの絵を完成させます。教師が描いた円の中に笑っている表情を自分から描くことがありました。教師が描いたものに付け足す作業も楽しんでいた様子です。





・「こころく」

⑥自分の気持ちを 12 項目３段階から選び、表現することができました。学年末に「成長の振り返り」を渡し、担任の先生からのメッセージを読み上げた時は、「こころく」で気持ちを聞くと「とてもうれしい」と表現することができました。気持ちを伝える手段の一つとして有効です。